

佛書解說大辭典

大東出版社藏版



昭和8年11月20日 初版発行
昭和39年5月1日 改訂発行
昭和55年6月25日 重版発行

仏書解説大辞典 第二巻
¥ 7000

版權
所有

編纂者 小 野 玄 妙
発行者 岩 野 真 雄
印刷者 村 雲 二 郎

発行所 株式会社 大東出版社

東京都文京区白山1丁目37番10号
電話 (816) 7 6 0 7

本書編纂要解

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小冊子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に内容解説を施し、且つその所在を明示したものである。

二、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。即ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮内省圖書寮、內閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗教典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より偽經、抄經、闕本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛教典籍を採録した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。即ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其内容解説にあつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解説をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解説するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類即ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるものに限り出来る丈内容そのものについて詳細な

る解説を施した。

一、本書の内容解説の形體はその要點を次の十項目とした。即ち、①題名、書名、具名略名異名併記。②卷數。③存、缺。④著者又は譯者、生存年代を併記。⑤著作年代又は譯出年代。⑥内容解説。⑦末書（注釋書參考書）。⑧寫刊の年月。⑨現所藏者、圖書館書庫名。⑩發行所名。の十項目である。この十項中前記第一、二類は⑧⑨を省略し、第三類は特に⑨の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は⑩の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は⑦の注釋參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が⑥に於いて執筆され、且つその解説に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解説に於ける十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

①、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本音、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。

日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本音の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符（—）を附し、全體としては音便慣讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引（昭和五年刊）に従つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異なる點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウキード氏の式に従つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏甘殊爾勘同目錄（大谷大學圖書館昭和六年刊）により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄（赤沼目錄—昭和四年刊）に従ふことにした。

②、卷數は其典籍の卷數を記したが、丁卷の異なる場合あるものは一々これを附記した。

③、存缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷號を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卅——卅字藏經。卅續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勘同總錄。明南——明南藏。Z——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄（法經等撰）。仁壽錄——衆經目錄（彥棕撰）。靜泰錄——衆經目錄（靜泰撰）。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋教錄。貞元錄——貞元新定釋教目錄。佛全——大日本佛教全書。真全——真宗全書。真大——真宗大系。日藏——日本大藏經。

①、著者又は譯者は其人の生存年代を出来る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を涉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に譲るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西曆を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中——線を用ひ、「年代——年代」なるは生死年を、「年代——」は生年、「——年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「——年代——」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「？」の符號を用ひた。僧傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸説あるものは其中の一を採用若しくは一説として別出したものがある。

⑤、著作年代は著作若しくは譯出の年號を記入した。

⑥、内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典翻譯に關する歴史的説明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ

た題名の箇所にて説明した。例へばクの部「俱舍論」ではその題下に具名「阿毗達磨俱舍論」と記し、詳細なる解説はアの部「阿毗達磨俱舍論」に於てなしたるが如し。

⑦、注釋參考書は典據を出来る丈詳細に調査して列記し、大體製作の年代順に従つて列舉した。

⑧、寫刊の年月、寫とあるは寫本、刊とあるは刊本のことにして、その出來の年代である。

⑨、現所藏者、圖書館書庫名は個人所藏のものは何某藏とし、圖書館所藏のものは其館名並に其館に於ける書目の函號を記入した。館名の略符は左の通りである。

谷大——京都大谷大學圖書館。龍大——京都龍谷大學圖書館。京大——京都帝國大學圖書館。正大——東京大正大學圖書館。駒大——東京駒澤大學圖書館。立大——東京立正大學圖書館。高大——紀州高野山大學圖書館。京專——京都（東寺）專門學校圖書館。哲——哲學堂圖書館。帝國——東京上野圖書館。內閣——內閣文庫。帝室——宮內省圖書寮。寶龜院——高野山寶龜院所藏。金剛三昧院——高野山金剛三昧院所藏。寶壽院——高野山寶壽院所藏。寶菩提院——京都寶菩提院所藏。

而して略符の下に數字等は何れも其所藏圖書館に於ける書架番號である。而して藏經、全書、叢書類は一般に現行されてゐるから所藏者（書庫）、發行所名は概ねこれを記入しないことにした。

力

火呬軌別錄

①(日)Kwa-un-ki-be=sa-roku.(支)Huo-hung-kuei-pieh-lu.
②一卷 ③存、大正一八・九三六No.914、縮條二、己續二・九・三

④本儀軌別錄は其名の示す如く火呬供養儀軌に附随せる眞言集かと稱する説もある。

最初に東北方大自在天王、東方帝釋天王、東南方火天王、南方炎魔羅天王、西南方濕哩底天王、西方水天王、西北方風天王、北方毘沙門天王、上方大梵天王、下方地居天子天子月天子等の十二天を始め諸星天子諸龍王一切使者及び諸鬼神より、大日如來不動明王等の眞言を説き、更に火呬儀軌一卷「護摩法」として火天を請ふの言「我今奉請火天之首、火中之仙、先行宗教、降臨此座、納受護摩」を出し更に火天の印や眞言を説き、又「火呬儀軌音義」を出して更に火壇に三種あり。即ち一は安穩火壇法、二は富饒火壇法、三は降怨火壇法なりとし各々に就て壇形、起首時供養の資具、檀木、坐方心の持方等を述べ、終に其等の護摩を行ふ月日を定めてゐる。諸儀軌彙承録第一(高野山八葉學會)諸儀軌決影、祕密佛教護摩(佐伯興人)、傳法院流傳授私勘(權田雷斧)等を参照。

⑤古寫本(梅尾高山寺)應保二寫(東寺寶善提院)

火呬供養儀軌

①(日)Kwa-un-ku-

yo-gi-ki.(支)Huo-hung-kung-yang-i-kuei. ②一卷 ③存、大正一八・九三四No.913、縮條一、己續二・九・四 ④唐善無畏(開元三・A.D.735)譯

⑤本軌は善無畏三藏の撰述である。故に一本の題の下には「三藏善無畏」の五字がある。由來護摩のことを説きし祕密佛教の經軌は諸多あるが、其根本なるものに三種存することは、諸儀軌彙承録に「護摩の本軌に、凡そ三本あり、一には瑜伽護摩軌、二には火呬供養儀軌、三には建立護摩軌云々」とある通りで、本軌は比較的短文ではあるが重要なものである。凡そ密教護摩の特色は大日經疏第二十に「護摩の義とは、謂く慧火を以て煩惱の薪を燒き盡して餘なからしむるの義なり云々」とある如くである。

故に火呬の二字に就ても彙承録第一によれば「火呬とは、火は護摩の義、呬は是れ淨菩提心の種子なり。疏の第二十に云く、智火とは即ち菩提心の慧光なり、乃至無始以來の無明の薪の積めるを燒き、復遺餘なきこと劫燒の時の火の灰燼皆盡きて蕩然として無垢なるが如し。是れ今の呬字の智火を以て無明煩惱を燒盡するが故に火呬の軌と名づくる也云々」とある。本軌は空海圓珍の將來する所にして、其の特徵を言へば、火天本尊の兩段を説き、三寶殿の略儀は本軌に依る。又息災等四種の差別を説き、初行護摩七日間修する常規は本軌に據つたものである。今内容を概論せば、最初「夫れ陀羅尼の法を修行せんと欲は先づ須らく道場を嚴飾し、内外清潔に衣服鮮淨にして

諸の誼難及び諸の戲論を離るべし云々」と述べて、日の初めて出づる時に供養を起首することを説き次で結界護身の法より觀想の法を出し、「金剛合掌して雙膝を地に著けて、次に嚩字を想へ、世界を焚き殄して灰燼の如くならしむ。乃至復觀ぜよ阿字空觀婆と成ると。復想へ、靈塔大日尊と成りて寶蓮花に坐せり云々」と述べ、更に火法に四種あり、第一扇底迦の法(息災法)は、災を息め罪を滅す法、第二補瑟微迦の法(增益の法)は、滿願及び諸の勝事を成就する法、第三阿毘遮魯迦の法(降伏の法)は、怨敵を退治するの法、第四攢迦羅の法(敬愛の法)は敬愛和合を求むるの法なりと説き、此等四種に相應する壇等供具の物質に就て述べ、次で護摩木(火木)は夜合木、桑、松、穀、栢等の木を用いて作り、檀木を井形に積み百八枝(乳木)を燒く法等を説き、更に護摩の供養物として、闍伽丸香林香三昧香五穀常合香等の造り方を述べ、次で此等を初め火天に次に本尊に火木と共にそれゝ供養する法を説く。又扇火の法を説きて、扇を以て火を扇ぎ、口を以て吹くことを禁じ、更に護摩のとき、火焰の相、火焰の色、火の音等によつて吉祥の相と不吉祥の相を知るの法、その相違によつて息災增益降伏敬愛の護摩に各々適不適ありと説き、復た「火を燒き供養すること七日を限りとなす。もし、事已むことを獲ずんば三七すること亦得」といひて、常の初行護摩七日修することの本據を出してゐる。諸儀軌彙承録第一(高野山八葉學會)、諸儀軌決影、

祕密佛教護摩(佐伯興人)、傳法院流傳授私勘(權田雷斧)、國譯一切經密教部第二解題等を参照。

⑥古寫本(梅尾高山寺)應保二寫(東寺寶善提院)

火呬供養儀軌

①(日)Kwa-un-ku-yo-gi-ki. 國譯火呬供養儀軌 ②一卷 ③存、國譯密教經軌第四 ④塚本賢曉譯

火急用意

①(日)Kwa-kyu-yo-i. ②一卷 ③存 ④文化四刊 ⑤(京大、一・二六カ・一)

火剋金血脈辨明論

①(日)Kwa-ku-kin-kechi-myaku-ben-myō-ton. ②一卷 ③存、法華三卷書卷中 ④日善記

⑤元文三刊(谷大、餘大・七一九) 寶曆三刊(龍大、研佛・享和二刊(龍大、二六九二・二))

火生長者受報經

①(日)Kwa-shō-chō-jia-ji-thō-gyō.(支)Huo-shēng-chāng-chē-shou-pao-ching. ②二卷 ③缺

④根本説一切有部毘奈耶雜事第二第三卷の抄出。

⑤(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

火性三昧法湖大事

①(日)Kwa-shō-san-mai-hō-ko-dai-ji. ②一巻 ③存

火定同行實

①(日)Kwa-ji-dō-gyō-jitsu. ②一卷 ③存 ④祖元記 ⑤享保六刊 ⑥(谷大)

火葬論

①(日)Kwa-sō-ton. ②一卷 ③存 ④英トム・フン著、舟橋振譯 ⑤明治一二刊 ⑥(帝國、二五・二八五)

火頭金剛像樣

①(日)Kwa-tō-kan

—gō-zō-yō (支) Hou-tou-chin-kang-hsi= ang-tyang. ①一卷 ②缺 ③(参考) 傳教大師將來越州錄

火天 ①(日)Kwa-ten. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆維抄第六之内

承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰

火布惹耶私記 ①(日)Kwa-tu-nyā

—ya-shi-ki. ②一卷 ③存 ④仁海(天曆

九—永承元 A. D. 955—1046) 說永承元、年九六寂) ④寫本(京大、日大末・三三六)

火滅經 ①(日)Kwa-mek-kyō. 現代

意譯火滅經 ②一卷 ③存、現代意譯根本佛教聖典叢書第四 ④赤沼智善譯

可圓慧恭大和尚行狀 ①(日)Ka-

en-e-kyō-dai-o-shō-gyō-jō. ②一卷 ③存 ④(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

可和尚碑文 ①(日)Ka-o-shō-hi-

mon. (支)K'o-ho-shang-pei-wen. ②一卷 ③缺 ④琳撰 ⑤(参考) 智證大師請來目錄

可喜福呂口決 ①(日)Ka-ki-buk-

ro-ku-ketsu. 柿袋口決、相承由教開書

②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

可睡齋御由緒定例書 ①(日)Ka-

sui-sai-go-yui-shō-jō-rei-shō. ②一卷

③存 ④(参考) 禪籍目錄

可睡齋略譜 ①(日)Ka-sui-sai-ryū=

ku-ryū. ②十二枚 ③存 ④大通著 ⑤寫

本(帝國、二三・二三五)

加賀松岡寺由緒 ①(日)Ka-ga-

shō-kō-ji-yui-shō. ②一卷 ③存 ④寫本

(龍大)別置)

加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼記

①(日)Ka-ku-rei-gen-buc-chō-son-jō-da-

ra-ni-ki. (支)Chin-chū-ling-yen-fu-ting

—tsun-sheng-to-lo-ni-ki. ②一卷 ③存、

大正一九・三八六No. 974c 已續二・九四

唐武微(—永泰元 A. D. 765—)述

④尊勝陀羅尼誦持の靈驗功德を説いてを

る。

佛微は不空と同時代の人であつて、その尊勝陀羅尼は金剛智から王開士、それから

蔣那、最後に武微に相承したと言ふことになつてをる。

波利譯の陀羅尼の上に句が添

加された因縁は如何といふに、玄宗皇帝の

開元年中、山西省の五台山の麓に、王某と

いふ居士があつた。此の居士が遠方へ旅行

した不在中、計らずその父が死んだのであ

る。居士は父の臨終に遇はないのを遺憾と

し、波利譯の尊勝陀羅尼十萬遍を至心に讀誦

した。少しも功驗がないので五台山を去ら

うとした。その時突然一老人が出現して王

に語つて云く「汝は勤敏であるが、然し汝

の誦する文句は脫落が多いので功驗が少い

のである。我今汝に全文を授くべし」と言

つて授けて呉れた。その授かつた陀羅尼を

誦すること千遍、空中簫管の聲聞え、天人

數人輩に圍繞せられて一天仙が現れて、

「我は是れ汝の父、汝が誦する陀羅尼の功

徳により今や正に天仙の王たることを得た

り」と言つて天に上昇したといふ。次に又

この王と同時代に王少府といふ人がゐた。

この人が波利譯の尊勝陀羅尼を誦し、その數が

正に數萬に至つた。或る夜、夢に一梵僧が

表はれ、少府に謂つて言く「賢者の念誦殊

に精誠である。歎くらくは、本誤りあるが

故に功薄し」と少府稽首してその眞を請ひ

口授された。その後、前記の王とこの王少

府とは代宗皇帝の天寶年間、共に洛陽に來

り住してゐた。一方金剛智から直接尊勝陀

羅尼を稟受した王開士も此所にゐた。然るに突

然王少府が頓死して又蘇生したのでその不

思議な出來事を聞かんとして、王開士、五

台山の王なる人が王少府を訪問した。その

不思議な因縁は次の如くであつたやうであ

る。最初王少府が頓死するや、忽ち二人の

使者が來つて、之に隨つて行くこと數十

里、一大樹の下に至つて休息した。その間

に彼はふと思ひ出して尊勝陀羅尼を呪して見

ると二使者は天上界に生れることを得た。斯

くすること無慮、地獄の罪人を悉く救ふこ

とを得たといふ。この三人が互に自身の傳

承した陀羅尼を讀み合ふと音旨字數少しの

異りもなく、符節を合すが如く一致したと

いふのである。(久野芳隆)

加持印言記 ①(日)Ka-jin-gon-

ji. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四八・

二)

加持祈禱 ①(日)Ka-ji-kai-tō. 眞言

祕密兩部祕法加持祈禱 ②一卷 ③存 ④

小野清秀著 ⑤昭和四刊

加持祈禱眞言祕密の解剖と其

奧傳 ①(日)Ka-ji-kai-tō-shin-gon-hi-

—mitsu-no-kai-dō-to-sono-oku-den. ②

一卷 ③存 ④日下徹道著 ⑤昭和六刊

⑥東京中央出版社

加持薰香作法 ①(日)Ka-ji-kun-

ko-sa-hō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

⑤(寶龜院)

加持作法集 ①(日)Ka-ji-sa-hō-

shū. ②二冊 ③存 ④徳川中期寫 ⑤(金

剛三昧院)

加持の力 ①(日)Ka-ji-no-chikari

②一卷 ③存 ④京都眞言宗各派聯合法務

所文書傳道部編 ⑤明治四二刊 ⑥(高大、

寄・一五七)

加持病患祈禱肝文鈔 ①(日)Ka-

ji-byō-gen-ki-to-kan-mon-shō. ②二卷

③存 ④日輝(寛政二—安政六 A. D. 1800

—1839) 述 ⑤明治一一刊 ⑥(谷大、餘大・二

四七四)(京大、日大末・七四八)(立大、A. O

八・七一・七三、七四、九七) ⑦東京須原屋

加州安心異亂記 ①(日)Ka-shū-an

jin-i-rau-ki. 文政年度加州安心異亂記

②一卷 ③存 ④加州安心論記の異本

⑤寫本(谷大、宗大・二四八九)

加州安心異論記 ①(日)Ka-shū-

an-jin-i-rau-ki. 文政年度加州安心異論

記 ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・二

五〇四)

加州安心論記 ①(日)Ka-shū-

an-jin-jō-ron-ki. 文政年度加州安心論記

②四卷 ③存 ④易行院法海(明和五一

保五 A. D. 1763—1834) 記 ⑤文政五(A. D.

1832) ⑥寫本(谷大、宗大・七一)

加州安心論講者書上 ①(日)

Ka-shū-an-jin-jō-ron-kō-ja-kakige.

② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(谷大・宗大・一一六二)

加州石川郡白山縁起

① (日) Ka-shi-shi-kawa-gun-haku-san-en-gi. ②

一巻 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第三

④ 本書は石川縣白山谷白山の縁起を漢文を以て記したもので、端首は缺け、處々に闕文がある。初めに天女が夢に現じて告げがあつた事を記し、方便身として九頭龍の形を示し、眞身として十一面觀音の姿を表現し、我は是れ妙理大菩薩なりと、此林中に遊び上皇を守り、中天下の諸君公を守り、下民を撫つとて、日本は神國なりとて、神代の神名を語り、われは伊弉册尊なり、今は妙理菩薩と號す、白山はわが神政の都なり、日本の男女は元神なりとて、神武天皇に至るまでの神代の歴世年代を語り、わが眞身はこの天嶺に在り、往きて禮すべしとて姿を隠された。是に於て泰澄は淨身清體天嶺に登り、閻浮檀金の長四寸なる本尊が八葉の蓮華に乗じ、珠玉瓔珞を垂れて光を放ち玉ふを拜し、社頭を建て勸請し、白山妙理大權現と號したと述べてある。

加州金澤御安心一巻記

① (日) Ka-shi-shi-kawa-gun-an-jin-ik-kwan-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大)

加州金澤御坊御教示

① (日) Ka-shi-shi-kawa-gō-bō-gō-kyō-ji. ② 一巻 ③ 存 ④ 開華院法住(一明治十 A. D. 1874)

⑤ 寫本(谷大)

加州法義爭論開書

① (日) Ka-shi-shi

① 寫本(谷大・宗大・三三八) ② 一巻 ③ 存

加毛物語

① (日) Ka-mo-mono-ga-tari. ② 三巻 ③ 教念閣諸記

④ 本書を修補したものに淨土異聞錄三巻あり現存。當時の奇蹟奇蹟を輯録したもの。

⑤ (参考) 淨土眞宗教典卷第二

加茂地藏院親玄方印信

① (日) Ka-mo-ji-zō-in-shin-gen-gata-in-jin. ② 一巻 ③ 存 ④ 徳川時代寫 ⑤ (寶龜院)

加樓烏陀夷經

① (日) Ka-lu-u-da-i-kyō. (支) Chia-lou-wu-to-i-ching. (日) M. 65 Lajukopama S. ③ 存、中阿含經第五〇(大正一 No. 26, 152)

甲斐萬福寺文書

① (日) Ka-i-mam-puku-ji-mon-jo. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

伽陀假語

① (日) Ka-da-kari-fu. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(高木)

伽陀口傳

① (日) Ka-da-ku-den. ② 一帖 ③ 存 ④ 徳川時代寫 ⑤ (寶龜院)

伽陀金剛眞言

① (日) Ka-da-kon-gō-shin-gon. (支) Chia-to-chin-kang-chen-yen. ② 一巻 ③ 存、大正一 No. 11, 110

④ 本眞言は、阿吒薄拘(Atavaku)大元帥無邊神力甘露咒と同類にして、無畏三藏譯の阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷上に、甘露咒は梵字で明記されてある(大正二一・一八八)。又この甘露咒は、漢音譯で阿吒薄拘附呪咒と稱せられて、現に大正藏經第二十一卷(二〇二)に出てある。但

し今の伽陀金剛眞言は、前記の二咒とは稍異つた所もあるが、大體に於て、同一系統の眞言であると見做すことが出来る。

(神林隆淨)

伽陀祕讀類

① (日) Ka-da-hi-san-rui. ② 數百帖 ③ 存 ④ 足利中期寫 (金剛三昧院)

伽彌尼經

① (日) Ka-mi-ni-kyō. (支) Chia-mi-ni-ching. (日) S. XLII. 6 Pachabhumaka S. ③ 存、中阿含經第三(大正一 No. 26, 17)

何義經

① (日) Ka-gi-kyō. (支) Ho-i-ching. (日) A. X. I Kimatthya. ③ 存、中阿含經第一〇(大正一 No. 26, 42)

何苦經

① (日) Ka-ku-kyō. (支) Ho-ku-ching. ② 一巻 ③ 失譯 ④ (參考) 出三藏記第四

何苦經

① (日) Ka-ku-kyō. (支) Ho-ku-ching. ② 一巻 ③ 缺 ④ 西晉竺法護(一太始二一建興元 A. D. 265—313)譯 ⑤ 中阿含經卷第三十六の別譯 ⑥ (參考) 三寶紀第六、內典錄第二、武周錄第八

何苦經

① (日) Ka-ku-kyō. (支) Ho-ku-ching. (日) cf. A. V. 31 Verses. ③ 存、中阿含經第三六(大正一 No. 26, 148) ④ (參考) 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

何耶揭唎婆觀世音菩薩受法壇

① (日) Ka-ya-ki-i-ba-kwan-ze-on-bo-satsu-ji-hō-dan. (支) Ho-ye-chieh-i-p'o-kan-shih-yin-p'u-sa-shou-fa-tan. ② 一巻 ③ 存、大正二〇・一七一 No. 1074

縮餘二、正續一・三・二

① 雜密の儀軌で、馬頭觀音法に屬する。造壇法及び馬頭觀音印明十種を説明してをる。

文和二寫

① (日) Ka-ya-ki-i-ba-zō-hō. (支) Ho-ye-chieh-i-p'o-hsiang-fa. 賀耶揭唎婆儀軌 ② 一巻 ③ 存、大正二〇・一七〇 No. 1073 縮餘二、正續一・三・二

④ 之は雜密の儀軌である。末尾に賀耶揭唎婆儀軌と書いてある。主として馬頭觀音の畫像方法を説き明したもので、四面二臂蓮華及び眞陀摩尼を持する像を詳述してをる。その文の内容は全く陀羅尼集經第六と一致する。その圖は覺禪鈔を参照すると載せてある。又次に四面二臂右手施無畏、左手蓮華を把る畫像法を説いてをる。第三に誦呪の方法を説き、第四に療病の印及び明乞食の印及び明を説明してをる。それから毘那夜迦を縛するとか、不淨を失するを治することとか護身とかの呪を説いてをる。

(久野芳隆)

何欲經

① (日) Ka-yoku-kyō. (支) Ho-yü-ching. (日) A. V. 52 Khatthya. ③ 存、中阿含經第三七(大正一 No. 26, 149)

河州紀行

① (日) Ka-shū-ki-kō. ② 一巻 ③ 存 ④ 昌瑞(光緒帝代 A. D. 1875)記 ⑤ 寫本(龍大・二〇五九・一)

河州御教示

① (日) Ka-shū-gō-kyō-ji. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(谷大・宗大・八六)

河州志紀郡土師村道明尼律寺

記 ①(日)Ka-shu-shi-ki-gun-ha-shi-mura-domyo-ni-risun-ji-ki. ②一卷 ③

存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三
④河内國南河内郡道明寺村眞言宗土師寺の
記で和文を以て綴られてゐる。始めに道明
寺はもと土師寺といふ、土師の里の寺なる
故である。開基聖德太子尼衆の伽藍を建立
せんと土師八嶋力をあはせ、住宅を捨て、
寺とし、土師氏は代々檀越となつた。光仁天
皇の時土師古人に姓菅原を賜はり、道實卿
に至つた。是善卿の妹覺壽比丘尼出塵の志
深く、當寺に於て落飾されたので、道實卿
も屢來られ、元慶四年に一夏九旬の間に一
刀三禮して十一面觀音の像を刻まれて、新
に一堂を造つて安置された。同八年には五
部大乘經を書寫して納められ、仁和二年に
は鏡に金泥を以て阿字を書して、阿字觀を
修せられ、延喜元年太宰權帥に左遷せらる
時、一夜を此寺に過され、遺身として佛舎
利五粒を覺壽尼に進じ、自身の像を刻みて
殘された。筑紫にて薨去の後遺物として、
阿彌陀經、心經、寶劍、石帶、笏、鏡など
を送られた。天慶四年土師寺を改めて道明
寺とした因縁、治安三年御堂關白道長が、
高野詣の序、大和七次寺を巡禮し、當寺に
一夜宿されし事、寛元四年興正菩薩が當寺
に於て文殊供養を修せられ、永仁六年四月
忍性律師の請願に依りて西大寺を始め三十
四ヶ寺に守護不入の沙汰を蒙つた時、當寺
も其一寺であつた。元龜元年高屋城兵亂の
火災にかゝり焼失したので、其後造替は出

來たが、昔の型ばかりのものである。

拾遺附錄に惟宗朝臣孝言が道明寺にて作
られる詩及び菅原道實の詩を載せてある。
奥書に右の一卷この度急用故御望に任せ
惡筆とは思へども、書寫せしむるなり、ま
ことに後見の嘲りを耻入り候。惠宗院秀海
とある。この人の作か、唯書寫か詳でない。

(中谷在禪)

河州本和讃

①(日)Ka-shu-hon-wa-san. ②一卷 ③存、異義集(了祥稿本)

第一 ④親鸞(承安三—弘長二A.D.1173—1263)撰

⑤河内國八尾の慈願寺に傳ふる三帖和讃の
古寫本なり。謂はゆる御草稿和讃と稱する
ものゝ一種である。親鸞の作られし三帖和
讃には行間に假名にて略解を施せる部分あ
りて、この略解の文句も寫傳本の種類に依
りて異同具略あり。文明五年に蓮如の開版
せられし一本廣く行はれ、これに相違する
ものを御草稿本と稱するなり。寛政十一年
深圃文明本を底本とし、河州本羽州本等の
異本を對照し、御草稿和讃と題して開版せ
り。河州本筆寫の年代は室町時代の中期と
推定すべし。(禿氏祐祥)

河中草龜經

①(日)Ka-chu-so-ki-kyō. ②(支)Ho-chung-tsoo-kuai-ching. ③一

卷 ④缺 ⑤失譯 ⑥雜阿含卷第四十三の
抄出 ⑦(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第
三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞
元錄第二六

河中大聚沫經

①(日)Ka-chū-dai-jū-mak-kyō. ②(支)Ho-chung-ta-chū-mo-

ching. ③一卷 ④缺 ⑤失譯 ⑥(參考)
出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二
四

河滴集

①(日)Ka-teki-shū. ②一卷 ③存、元亨泉

河東祇樹一源統禪師行狀

①(日)Ka-tō-ji-ichi-ten-iō-zen-ji-gyō-
jō. ②一卷 ③存、續群書類從第九輯 ④

岐陽方秀(康安元—應永三A.D.1361—
1424)撰 ⑤應永二(永A.D.1419)

⑥京都祇園社畔の祇樹庵の開山一源會統禪
師の行業を、岐陽方秀和尚が、應永二十六
年十月初祖諱辰(A.D.1419)に撰文したも
のである。一源は、肥後菊地に生れ、南禪
寺二十五世平田慈均に嗣ぎ、永源寺寂室元
光禪師に參じ、應安初年尼玄智の發願にて
祇樹庵を創し、攝津光雲寺に化を宣へ、後小
松天皇應永六年四月二十五日(A.D.1399)
示寂した。壽七十一、臘五十。春屋妙葩、
龍湫周澤、海靈見、古劍妙快、伯英德俊、
剛中令柔、南宗綱等の當時の諸豪と交遊し
た。(大久保堅瑞)

河南小部集

①(日)Ka-nan-shō-bu-shū. ②一卷 ③存、道隱(寛保元—文

阿實勝法鈔

①(日)Ka-shaku-hō-shō. ②九卷或六卷 ③存、日芳(一

延享三A.D.1746)撰 ⑤延慶三刊 ⑥立
大、A.O.五七一五八

阿實勝法滅罪鈔

①(日)Ka-shaku-hō-bo-metsu-zai-shō. ②一篇 ③存、日

蓮聖人御遺文、原文對照口語譯日連上人全

集第一四條書之内 ①日連(貞應元—弘安
五A.D.1222—1282)述 ⑤文永一〇(A.D.
1273)

⑥佐渡流罪中の日連が一の谷から鎌倉の四
條金吾に與へた書。

已前には伊豆の國へ流され今又佐渡の國
へ流されたことは、法華經の故であつて、
ひたすら謗法を呵責するためである。隨つ
て如何なる難に遭ふとも其は謗法を呵責す
る功德によつて過去の重罪を滅し、今生に
佛果を得るためであると思へば、流罪死罪
も法悦であると感懷を述べ、又流罪中にも
人人が慰問したり供養したりするのは、教
主釋尊がそれらの人々の心に入り替はせ
たまふものであらうと思つて感涙にむせぶ
旨を語り、更に天變地異の頻發は末法應時
の救済者たる本化の大菩薩出現の先瑞であ
る旨を明し、最後に母の追孝と兄弟間の親
睦とを諭したものである。

⑦錄外微考下、錄外考文六 (馬田行啓)

阿調阿那含經

①(日)Ka-chō-a-na-gon-gyō. ②(支)Ho-tiao-o-na-han-ching.

荷鴨阿那含經 ②一卷 ③失譯 ⑥(參考)
出三藏記第三、法經錄第三

阿難阿那鉢經

①(日)Ka-nan-a-na-gon-gyō. ②(支)Ho-nan-o-na-han-ching.

荷鴨阿那含經 ②一卷 ③存、大正一四・
八二一No.538、縮倍七、己一五・一、北45
寬、南853寬、元853寬、明北15孝、清15
孝、麗840無、天847寬、指793無、法833無、
至1079上、明南728孝、Nj.719 ⑤卷無闕
譯 ⑥東晉太元六一〇(A.D.381—395)

に善惡の道を説き、四天王の稱譽も等心に入つては耳を傾けなかつた。比丘が彼に問うて、邊に白衣有る無きは何を嫌疑する故かと言ふのに對し、彼は佛語至誠にて白衣不信者は泥梨中に墮つべきを恐れ、佛語を信ずる者は來つて我に承事し、我を布施し、人を煩擾するを喜ばない爲であるとした。佛は之を聞いて、阿羅阿那鐺の八事を説き、求めざるを人に知らしめんと欲せず、乃至信自羞・自慚・精進・自觀・得禪・黯慧、人に知らしめんと欲せず、人を煩擾せしめざらんとてゐると説いたとした。

行文平易であるが、さして特殊の思想はない。西藏藏經に一致するものがあると。

⑦〔參考〕三寶紀第七、內典錄第三、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第五

果尊王經 ①(日)Kwa-som-o-kyō. (平等通昭)
(支)Kuo-tsun-wang-ching. ②1卷 ③

缺 ①失譯 ②〔參考〕 出三藏記第四、武
周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄
第八、第二五

果分考文集末書切紙 ①(日)Kwa
-bun-kō-mon-shū-mas-sho-kiri-kami. ㊟

一卷 ③存、續淨土宗全書第一四 ④良天聖觀(正應一―應安一 A. D. 1289―1369)述 ⑤良慶の述作たる名越派の相傳本果分不可説を、論果分下、因分下、宗家果分下、餘宗許果分下、果分之中、果分下の六段に分けて註釋し、終りに經藏本尊事が述べてある。

果分考文助證 ①(日)K wa-bun-kō
②一卷 ③存、續淨土宗全
-mon-jo-shō.

書第一四 ④ 良山妙觀(永仁二—康安元 A. D. 1294—1361 | 說永仁元 A. D. 1293 生) ⑤ 延文三(A. D. 1358)五月

⑥本書は名越派の相傳たる果分不可説を證明する爲めに、その助證として華嚴宗、三論宗、法相宗、密宗及天台宗の五箇大乘の因分果分の説明を舉ぐるものにして、結文に「淨土宗因分果分事、果分上果分（意氣雖多且先付華嚴經考之）善賢菩薩因位發十大願、此願於極樂令成就圓滿、此菩薩內證花嚴經也」と述べ、更に果分不可説に對する門下の疑問を解く爲に、良山が壯年の頃聽ける會通並に證文を舉て説示してある（『繁城矢ノ目如來寺月形函』（越前西福寺不明函）（原田靈道）

果分考文抄 ①Kwa-bun-kō-mon-
shō. 果分不可説 ②一卷 ③存、續淨土

宗全書第一四 ㊦ 良慶明心(文永六一建武三
A.D. 1269—1336)述 ㊧ 正中(〔A.D. 1325〕
果分考文抄見聞 ㊨ (日)K-wa-bun
-kō-mon-shō-kem-mon. ㊩ 存、續淨土宗

全書第一四 ④良天聖觀(正應二—應安二—
A. D. 1289—1369a)記

⑤果分考文抄に就いて良山のなせる談義を其資良天が記したもの、果分不可説に關する重要事項を抽出して問答體を以て注釋してある。卷末に良天は「末流の龜鏡として異義を存すべからず、此書は闇に燈を得たるが如く、盲人の眼を得たるが如し」と云ふ。以て本書の名越派に於ける地位を知ることが出来る。

果分述傳集並裏書 ①(日)Kwa-
bun-jutsu-den-shū-narabini-ura-gaki.

②一卷 ③存、續淨土宗全書第一四 ④阜山妙觀(永仁二—康安元 A. D. 1294—1361 一說永仁元 A. D. 1293 生)註 ⑤文和二(A. D. 1353)

⑥此書は淨土法門の果分不可説の意義を相傳する旨を述ぶるものにして、一果分事、二學匠傳持事、三道場莊嚴事、四本尊次第事、五重書次第讀事、六免許狀事の六項より成る。良辨尊觀は正和二年七月、良慶明心(眞)は元亨三年正月、良山妙觀は文和二年正月末代の爲めに設我得佛十方衆生を手本とし、宗要、傳通記、決疑鈔並手印、果

果分不可說 ①(日)Kwa-bun-fu-ka
—setsu. 果分考文抄 ②一卷 ③存、續淨

土宗全書第一四 ㊦良慶明心(文永六—建武三A. D. 1269—1336)述 ㊧正中一(A. D. 1335)五月

⑤本書は名越派傳書の一、派祖良辨尊觀の意に依つて地論の因分可說果分不可說の文を取り、淨土の經論釋に果分不可說の深意あることを主張するものである。論因分可說果分不可說之文、宗家因分可說果分不可

說之文、餘容許果分不可說之文、果分之中
果分之文の四段に分けて、實に此教は大之
中大、深之中深、上之中上、無上大利直
說、果分の智印、終窮之極談と説いてあ
る。良慶の門下良山妙觀は貞和二年八月に
此書を相傳して、彌陀果人を法門主とする
今教が眞の大之中大なることを追記して以
後、名越派稟承の書と成る。

果報聞見錄 ①(日)Kwa-ho-mon-ken-roku. ②一卷 ③存、潛園集錄第四

❶雪雁記 ❷刊本(谷大・餘大・一六六八)
花間笑語 ❶(日)Kwa-gen-shu-go.
 ❷四卷 ❸存 ❹寫本(谷大・餘大・三一五四)
花山記 ❶(日)Kwa-zan-ki. 華山私

記 ③ 缺 ④ 遍昭(弘仁八—寛平二 A.D.
817—890) 記

諸會末(大日本佛教全書第三六阿婆縛抄二)等に援引。

⑦〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目、自在金剛集第八

花上集

①(日)Kwa-jō-shū. 大雅遺韻 ②一卷 ③存 ④文學契選 ⑤〔參考〕日本釋林撰述書目

迦夷王頭布施經

①(日)Ka-i-o-an-fu-se-kyō. (支) Chia-i-wang-tou-pu-shi-ching. 迦夷國王頭布施經 ②一卷

③缺 ④失譯 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦才淨土論

①(日)Ka-zai-jō-do-ron. (支) Chia-tsai-ching-tu-lun. 淨土論 ②三卷 ③存、大正四七・八三No. 1963、元續二・一二・三、淨土宗全書第六 ④唐迦才(貞觀元A. D. 627)撰 ⑤〔注釋〕餘照鈔五卷(刊、續淨)知俊 〔參考〕蓮門類聚經釋錄卷上、淨土真宗教典第三

迦才淨土論餘照鈔

①(日)Ka-zai-jō-do-ron-yō-ke-shō. 淨土論餘照鈔 ②一卷 ③存、續淨土宗全書第七 ④法譽知俊(寶曆五A. D. 1755)述

⑤淨土論餘照鈔と云々。迦才の淨土論の注釋。全五卷の中、第一卷を玄義として淨土論の大意を明し、第二卷以下を文句として、その文々句々につきて釋を施す。然して第一卷玄義は大意、釋名、入文解釋の三に分ち、大意を更に造論興意、擬述作時、論旨梗概、藏教分齊の四科とし、その中造論興意

を教時符契、正論由致の二科に分つ等、細き分科のもとに淨土論の句々につき註釋を施してゐる。卷頭に源國の序、卷末に知東の跋を附し、寶曆二年に刊行したものである。

迦葉因緣經

①(日)Ka-shō-innen-kyō. (支) Chia-shē-yin-yuan-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉戒經

①(日)Ka-shō-kai-kyō. (支) Chia-shē-chieh-ching. 迦葉禁戒經 ②一卷 ③失譯 ④〔參考〕 出三藏記第三

迦葉詰阿難經

①(日)Ka-shō-kutsu-a-nan-kyō. (支) Chia-shē-chi'o-nan-ching. 迦葉責阿難度羅漢論 ②一卷 ③失譯 ④雜譬喻經の抄出 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、仁壽錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

迦葉解經

①(日)Ka-shō-ge-kyō. (支) Chia-shē-chieh-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉結經

①(日)Ka-shō-ke-kyō. (支) Chia-shē-chieh-ching. ②一卷 ③存、大正四九・四No. 2027、縮藏八、元續二・九、北1024、南1049、元1036、明北1356、清1356、麗1033、天1031、指991、法1011、至1474、晉、明南1113、隋、1333 ④安世高譯 ⑤建和一一建寧三(A. D. 148-170)

⑥本經は釋尊滅後久しからずして、釋尊の所説の散逸するを恐れ、これを後世に傳授

せんと欲し、迦葉座長となり五百の阿羅漢と共に羅閱祇(王舍城)に於て經と律とを結集せる所謂世に云ふ第一結集の狀況を述べた經である。併しながら本經に於て、經卷法律諸藏を集むとあり、阿難が經を誦宣せる次第に關してはこれを詳述しあるも、優波利が律を誦宣せることに關しては一言も述べてない。又阿難の突吉羅罪に就き本經は九過をあげてゐる點は、他の諸傳よりも詳しい。第一結集に關する諸文獻は左に記する如くである。

四分律。五分律。善見毘婆沙律。根本説一切有部毘奈耶雜事。撰集三藏及雜藏傳。付法藏因緣傳。阿育王傳。大智度論。大唐西域記。デーバヴァンサ。マハーヴァンサ。チュルラヴァツガ。スマンガラ・ウキラシニー等。

⑦〔參考〕 三寶記第四、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第二 (中田源次郎)

迦葉結集戒經

①(日)Ka-shō-ke-tsui-jū-kai-kyō. (支) Chia-shē-chieh-chieh-ching. ②一卷 ③缺 ④東晉代高公譯 ⑤〔參考〕 開元錄第一五、貞元錄第二五

迦葉結集傳經

①(日)Ka-shō-keitsu-jū-den-kyō. (支) Chia-shē-chieh-chi-chuan-ching. 迦葉結集經、迦葉結集傳經 ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(太始一一建興元A. D. 266-313)譯 ⑤〔參考〕 開元錄第一五、貞元錄第二五

迦葉禁戒經

①(日)Ka-shō-kon-kai-kyō. (支) Chia-shē-chin-chieh-ching. 摩訶比丘經、眞偽沙門經 ②一卷 ③缺 ④東晉代退公譯 ⑦〔參考〕 法經錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二五

東晉代退公譯 ⑦〔參考〕 法經錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二五

迦葉禁戒經

①(日)Ka-shō-kon-kai-kyō. (支) Chia-shē-chin-chieh-ching. 摩訶比丘經、眞偽沙門經、禁戒經 ②一卷 ③存、大正二四・九一一No. 1469、縮藏一〇、元一七・三、北330、南944、元998、明北1106初、清1106初、麗937入、天934奉、指894入、法922入、至121顯、明南1290比、隋1111 ④劉宋沮渠京原(大明八A. D. 464)譯

⑤摩訶迦葉を對告衆として禁戒を説けるもの。始めに比丘の爲すべからざる行爲十八條を擧げ、次に沙門の眞偽と持戒の關係、四事像持戒の人即ち似而非なる持戒相の四條を示し、最後に禁戒の無形無著なることを説く。

此經は經錄には多く小乘律部に編入されてゐるが、正に大乘戒經に屬するものである。それは比丘の非行中に「人の菩薩道を作すを止む」といふ如き、又戒の無形なるを説いて「戒は諸の瞋恚なく安定して世道に就度する、是の如きを持戒と爲す」といふ如きに依て知らる。

此經を京聲譯とするは歷代三寶記第十以下であつて、出三藏記集の安公失譯經錄中に「迦葉戒經一卷、或云迦葉禁戒經」と云ひ、法經錄には譯人を出さず、又歷代三寶記第七には始興錄に依りて晉末退公の譯する「迦葉禁戒經一卷、一名摩訶比丘經、一名眞偽沙門經」を擧ぐ。然るに眞偽沙門經は出三

藏記集新集失譯錄に列ねるもので、三寶紀第十には宋慧簡譯とする。かくして二經は並び行はれ法經錄、内典錄は並舉してゐるのであるが、智昇は二經の首尾全同なるによりて「迦葉禁戒經一卷、一名摩訶比丘經、亦名眞偽沙門經」とし、譯者を三寶紀、内典錄によりて京聲とした。斯くて此經の譯者は遂かに決定し難いものがある。

⑦〔參考〕三寶紀第一〇、衆經目錄第五、内典錄第四、譯經圖記第三、開元錄第五、貞元錄第八 (大野法道)

迦葉仙人說醫女人經

①(日)Ka-shō-sen-nin-se-tsū-ti-nyō-nin-gyō. (支)

China-shē-hsien-jén-shuo-ti-nū-jén-ching. 一卷 ③存、大正三三・七八七No. 1691、縮藏九、已一五・五、北1234陪、南239陪、元123陪、明北878陪、清878陪、麗2227兵、天1219陪、法1344毅、至1167外、明南897風、Nj. 883 ④宋法賢(一咸平四 A. D. 1001)譯

①極めて短少の經である。嘲嚙迦仙人が懷孕して滿十月乃至十二月にて出産するが、其の中間に病患あり、苦痛を受けるが、その方藥救療を師迦葉に問うた、師は救療の爲に方藥を述べた。第一月は胎藏不安にて梅檀香蓮華優鉢羅花を水に入れ、乳汁乳糖を入れ同煎し温服すれば、損傷が無い。第二月は青色優鉢羅花・俱母那花根・蔴角仁・羯細嚙迦等藥を等分し篩にて鉢と爲し、乳汁と煎用する。第三月は迦俱嚙藥叱囉迦俱嚙藥及び毘麻根等の諸藥を水と和し極細とし、乳汁を入れ煎じ、乳糖及び蜜を入れ、

冷服する。第四月は痰草根と枝葉等憂鉢羅花と莖幹等を用ひ、水に和し乳汁と煎じ冷服する。第五月は瓠子根及び憂鉢羅花を等分し、篩にかけ細とし、葡萄汁・乳汁・乳糖に入れ煎じ冷服する。第六月は閉阿羅藥子・摩地迦羅惹藥・薩訖多嚙藥を用ひ、水と和し細となし、乳汁を入れ同煎し、乳糖と蜜を入れ、冷服する。第七月は痰草の枝葉と根とを篩にかけ鉢と爲し、乳糖と蜜にて丸となし、肉汁にて服し、又煮豆粥飯を食する。第八月は三輪譏藥蓮花青憂鉢羅花痰草を各等分とし、冷水にて和し研して細とし、乳汁糖蜜を入れ同じく煎じて冷服する。第九月は毘麻根・迦俱嚙藥・舍羅針・般尼藥・沒哩智底藥を用ひ、等分し冷水にて和し研して細とし、乳汁を入れ煎じ、冷服する。第十月には素豆憂鉢羅花を用ひ、等分し水にて和し研して細とし、乳糖と蜜と乳汁にて煎じ、冷服する。十一月は青憂鉢羅花・娑路剛藥蓮花と莖等を等分し、同じく處方する。第十二月は迦俱嚙藥叱囉迦俱嚙藥・甘草・憂鉢羅花を同じく處方して服せれば、胎藏安らかであるとする。

行文平易であつて、散文より成る。この經は佛教的色彩は全く無く、純然たる醫書と見做すべきものである。何故にかゝる論書が經藏に編入されたかは、諒解に苦しむ。壽命吠陀(Ayurveda)等から系統を引く外道書中の印度醫書の一に屬するものである。(平等通昭)

迦葉獨證自誓經

①(日)Ka-shō-doku-shō-j-i-sei-kyō. (支) China-shē-tē-

cheng-tzū-shih-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑦〔參考〕出三藏記第四、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉赴佛泥洹經

①(日)Ka-shō-fu-butsu-naï-on-gyō. (支) Chia-shē-fu-bu-

ni-yūan-ching. 佛般泥洹時迦葉赴佛經、迦葉赴佛泥洹經 ②一卷 ③失譯 ⑦〔參考〕出三藏記第四、法經錄第三、三寶紀第四、武周錄第一

迦葉赴佛般涅槃經

①(日)Ka-shō-fu-butsu-hatsu-ne-han-gyō. (支) Chia-

shē-fu-fu-pan-nien-p'an-ching. 般泥洹時大迦葉赴佛經、摩訶迦葉經、佛般泥洹摩訶迦葉赴佛經 ②一卷 ③存、大正二二・一一五No. 393、縮藏一〇、已二六・六、北996飛、南1011飛、元1008飛、明北1223陪、清323陪、麗1001飛、天998飛、指961飛、法935飛、Nj. 1330 ④竺曇無蘭譯 ⑤太元六二〇(A. D. 381—395)

①佛の上足の弟子大迦葉が、佛の入涅槃の時、波和と俱尸那羅との中途に在りて、佛の入滅を知り、急ぎその場所に赴くことを記した經典であつて、D. 16 Mahāparinibbāna. (It. 162) 長二遊行經(大正一・二八b以下)、佛般泥洹經下(大正一・一七三c以下)、大般涅槃經下(大正一・二〇六b以下)、般泥洹經(大正一・一八九b以下)に含まる、記事を別行したものである。この別行經典にては、人々迦葉を呼んで佛の師と爲すと云ふこと、最後の偈中に「法身慧常存、莫呼永泥洹」とあることが注意を呼ぶものであり、從つて別行されて後に原

本に後期の變化があつたことを示してゐるものである。(赤沼智善)

迦葉佛藏抄

①(日)Ka-shō-butsu-zō-shō. (支) Chia-shē-fu-tsang-ch'ao. ②一

卷 ③隋信行(大同七—開皇一四 A. D. 541—594)撰 ④疑偽經 ⑦〔參考〕開元錄第一八

迦葉品梵藏漢六種合刊

①(日)Ka-shō-bon-bon-zō-kan-roku-shū-gō-kan. (支) Chia-shē-p'in-fan-ts'ang-han-lin-chung-ho-kan. 大寶積經迦葉品梵藏漢六種合刊 ②一卷 ③存 ④鋼和泰(ホーランド)編 ⑤民國一三刊 ⑥(京大、佛教・A. 一一八) ⑦上海商務印書館

迦葉問論

①(日)Ka-shō-mon-ron. (支) Chia-shē-wen-lun. 迦葉問尼論 ②一

卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕内典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

迦旃延說法沒盡偈經

①(日)Ka-senn-en-sep-pō-motsu-jin-ge-kyō. (支) Chia-chan-yen-shuo-fa-mo-chin-chieh-ching. ②一卷 ③失譯 ⑦〔參考〕武周錄第一一、開元錄第二、貞元錄第四

迦旃延無常經

①(日)Ka-senn-en-mu-jō-kyō. (支) Chia-chan-yen-wu-ch'ang-ching. ②一卷 ③失譯 ⑤生經第二卷の抄出 ⑦〔參考〕出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

迦旃延無常經

①(日)Ka-senn-en-mu-jō-kyō. (支) Chia-chan-yen-wu-ch'ang-ching. ③存、生經第二(大正三 No. 154, 17)

迦旃偈

① (日) Ka-sen-te. (支) Chia-chian-chieh. 迦旃延偈經、迦旃延說法盡偈 ② 一卷 ③ 缺 ④ 失譯 ⑤ (參考) 出三藏記第三、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一。

迦提羅越問五戒經

① (日) Ka-dai-ra-tsu-mu-go-kai-kyō. (支) Chia-ti-to-yeh-wen-wu-chieh-ching. ② 一卷 ③ 缺 ④ 失譯 ⑤ (參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五。

迦絺那經

① (日) Ka-chi-na-kyō. (支) Chia-chih-na-ching. ③ 存、中阿含經第一九(大正一 No. 26, 80)。

迦丁比丘說當來變經

① (日) Ka-chō-bi-ku-seta-to-rai-hen-gyō. (支) Chia-ting-pi-chi-shuo-tang-tai-pien-ching. 大仙迦丁所記當來祕說要集、迦丁比丘當來變經 ② 一卷 ③ 存、大正四九・七 No. 2028、縮藏八、正三六・九、北四四五、南四三六、元四六五、明北一三六、清一三六、英、麗一四四〇、天四四六、指一四〇二、法一四三、至一四九五、明南一三三、N. 1371 ④ 宋代 (A. D. 420—479) 譯。

⑤ 本經は迦丁比丘當來變經と云ひ、詳しくは大仙迦丁所記當來祕說要集と云ふ。最初に迦丁比丘は正法將に滅せんとするの現時、多くの出家は佛法を護持せず、佛戒を持たず、佛塔寺を莊嚴することに心を致し、且つ文字に貪著し祕惜して傳へず、嫉妬心、憍慢心を懷き互に相謗毀し鬭諍し、引いては俗人の中に入つて飲酒し姪事につける等々の生活をなし、却つて持戒清淨護法の比丘あるを見てはこれを罵辱する等漸次墮落し行く現狀を嘆いてゐる。次に拘睺彌國に於ける說戒最後の大布薩會、即ち法滅時の記事をあげ、正法將に滅せんとするの時期近きことを示してゐる。されば今の内に正法を護持し戒律を奉行して勤行精進せざれば悔ゆるも及ばざることを誡めてゐる。

以上本經は正法末の狀況を記せる經である。法滅時の記事に就いては本經の外に雜阿含經卷第二十五、阿育王傳、迦旃延說法沒盡偈、大集月藏分法滅盡品、摩訶摩耶經、婆沙論卷百八十三等あり。

⑦ (參考) 出三藏記第四、法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一一、開元錄第五、貞元錄第八 (中田源次郎) 迦旃色迦王に送れる馬鳴の書翰に就て ① (日) Ka-ni-shi-kaō-ni-oku-re-ru-me-myō-no-sho-kan-ni-tsai-to. ② 一卷 ③ 存 ④ 寺本婉雅著 ⑤ 刊本(谷大、餘大・三六七四)。

迦留多王經

① (日) Ka-ru-ta-gyō. (支) Chia-lu-to-wang-ching. ② 一卷 ③ 缺 ④ 失譯 ⑤ (參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第二、第一五、貞元錄第四、第二五。

迦樓羅

① (日) Ka-lu-ra. ② 一卷 ③ 存、大日本佛教全書第五〇覺禪鈔之内 ④ 覺禪(康治二—壽永元後 A. D. 1143—1182)撰。

迦樓羅

① (日) Ka-lu-ra. ② 一卷

③ 存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛抄之内 ④ 承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰。

迦樓羅王念誦次第

① (日) Ka-lu-ra-onen-jū-shi-dai. ③ 存 ④ 寫本(寶龜院)。

迦樓羅及諸天密言經

① (日) Ka-lu-ra-gyā-sho-ten-mitsu-gon-gyō. (支) Chia-lou-to-chi-chu-fien-mi-yen-ching. 迦樓羅王持念經 ② 一卷 ③ 存、大正二一・三三一 No. 1278 ④ 唐代般若力譯。

⑥ 末尾には迦樓羅王持念經とある。最初迦樓羅の説明をなし、次に辨事印、嘴印、加囉印、薩婆(蛇)印、莽羯囉(鯨魚)印、跋迦又(金翅鳥)印、心印を説く。それから伏毒の法、療毒の法、自眼藥法、收毒法を叙述してゐる。次に迦樓羅娑度(善哉)曼荼羅を説いてゐる。その次は畫像法がある。四臂二手合掌二手與願の印をなす像が説明されてゐる。十卷抄第九にその圖像が載せてある。次に五大天觀門を述べてゐる。即ち千頭風天(覺禪抄參照)、火天、地天、水天、虛空天を述べてゐる。次に堅固壇門に於いて壇作法を説き、更に進んで療蛇毒の法を説き明してゐる。最後に存想壇法即ち病人と行者との處する壇の位壇を想念する方法を説き明してゐる。(久野芳隆)

⑦ 科往生拾因 ① (日) Ka-o-jō-jū-in. 往生拾因 ② 一卷 ③ 存 ④ 延寶六刊 ⑤ (立大、A. 三〇・二六)。

科學上より見たる弘法大師

① (日) Ka-gaku-jō-yo-ri-mi-ta-tsu-kō-bō-dai-shi. ② 一卷 ③ 存 ④ 青柳榮司著。

⑤ 昭和三刊 ⑥ 京都六大社 科學上より見たる極樂の實在 ① (日) Ka-gaku-jō-yo-ri-mi-ta-tsu-goku-raku-no-jitsu-zai. ② 一卷 ③ 存 ④ 伊藤圓定著 ⑤ 大正九刊 ⑥ 日本神書刊行會 科學と佛教の調和 ① (日) Ka-gaku-to-buk-kyō-no-chō-wa. ② 一卷 ③ 存 ④ 加藤三吾著 ⑤ 明治二六刊 ⑥ (正大、一〇七・一四六)(谷大、外洋・七九二)(帝國、一八・三三三)。

科觀音經選註

① (日) Ka-kuan-on-gyō-sen-chū. 觀音經選註 ② 一卷 ③ 存 ④ 亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)錄 ⑤ 寛文一〇刊 ⑥ (高大、寄・一・二三)。

科光明眞言經照開鈔

① (日) Ka-kō-myō-shin-gon-gyō-shō-an-shō. 光明眞言經照開鈔 ② 三卷 ③ 存 ④ 亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)述 ⑤ 刊本(高大、寄・一・三三)。

科十一面陀羅尼經鈔並尊像文

① (日) Ka-jū-ichi-men-da-ra-ni-kyō-shō-narabini-son-zō-mon. 十一面陀羅尼經鈔並尊像文 ② 二卷 ③ 存 ④ 亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)述 ⑤ 延寶七刊 ⑥ (高大、寄・一・三三)。

科新經序鈔

① (日) Ka-shin-gyō-jō-shō. ② 一卷 ③ 存 ④ 亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)述 ⑤ 刊本(高大、寄・一・二四)。

科隨求陀羅尼經鈔

① (日) Ka-zui-gu-da-ra-ni-kyō-shō. 隨求陀羅尼經鈔

弘法大師の建てた石牆が損じたのを、發起勸進して新しく浄土三部經を刻して更に外圍に造り、御廟中の二十句の文石を刻みて建てたる事を記し、次に延享二年十月十一日入寂、壽七十七歳、法泉寺にある肖像の贊を和譯して掲げてある。最後に學信和尚の興學編に師を評せるを引きて「文章といひ、學才といひ、誠に天下高嶺の人なり」と稱し法孫人なく著述稿本悉く散滅して傳はらざるを惜んでゐる。

附録は法泉第十四世攝譽の筆にて、その中に小橋成道寺沾譽上人の珂然上人略傳あることを記し、一心寺の難波名號の緣起の碑も珂然の作なると、其他百萬遍知恩寺の鐘銘、大阪生玉圓通寺、同所法音寺の鐘銘も珂然の作なると、及び珂然の師は珂憶、珂憶の師は珂碩なること、天保十三年が百回忌に相當する爲め報恩の爲め印行する旨を記してゐる。

①天保一二刊(正大、一五一六・二二八)

(中谷在禪)

家源餘滴

①(日)Ka-gen-yo-teki.

②四卷 ③存 ④慶長年間寫 ⑤龍大、研佛)

家乘錄

①(日)Ka-jō-roku. ②二卷

③存 ④〔參考〕禪籍目錄

家中鈔

①(日)Ka-chū-shō. ②一卷

③存 ④日精(一天正一二A.D. 1584)述 ⑤原本(佐渡世尊寺藏)寫本(立大、D.O. 二七三)

家庭教談

①(日)Ka-tei-kyō-dan.

②一卷 ③存 ④荒井淚光著 ⑤大正二刊

⑥東京一喝社

家庭講話

①(日)Ka-tei-kyō-wa.

②一卷 ③存 ④佐々木珍龍著 ⑤大正二刊

修養世界社

家庭講話

①(日)Ka-tei-kyō-wa.

②一卷 ③存 ④河崎顯了著 ⑤昭和三年刊

⑥(谷大)

家庭說教

①(日)Ka-tei-sek-kyō.

②一卷 ③存 ④河崎顯了著 ⑤明治三九刊 ⑥(谷大、宗洋・一五七)

家内教示辨筆記

①(日)Ka-nai-kyō-jishu.

②一卷 ③存 ④易行院法海(明和五一天保五A.D. 1768—1834)述 ⑤明治二四刊 ⑥(谷大、宗小・一二六)

家内示談

①(日)Ka-nai-jishu.

②一卷 ③存、日本教育文庫第一 ④龍潤述

假字類聚

①(日)Ka-jī-ruijū.

②五卷 ③存 ④寫本(正大、一〇一・二八)

假定の殻を破りて

①(日)Ka-tei-no-kara-o-yabu-rūie.

②一卷 ③存 ④二階堂隆生著 ⑤大正一〇刊 ⑥(谷大、外洋・二四五六)

假名書正法眼蔵

①(日)Ka-na-shō-hō-gan-zō.

②十七卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目錄

假名書目錄

①(日)Ka-na-shō-moku.

②一卷 ③存 ④光遠院惠空(正保元—享保六A.D. 1644—1721)撰 ⑤寫本(谷大、宗大・三三三〇)

假名聖教

①(日)Ka-na-shō-kyō.

②一卷 ③存 ④宗大・三三三〇

假名聖教體斷

①(日)Ka-na-shō-tai-zei.

②一卷 ③存 ④堀江慶人(一天保二九A.D. 1896)著 ⑤寫本(谷大)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

⑦假名聖教眞宗法要御引文

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

假名聖教眞宗法要御引文

①(日)Ka-na-shō-shin-shō-hō-kyō-go-in-mon.

②一卷 ③存 ④琢成(一天保頃A.D. 1830—1844)編 ⑤天保一五刊 ⑥(龍大、研眞)

⑦假名聖教眞宗法要御引文

假名聖教跋文集

①(日)Ka-na-shō-kyō-batsu-mon-shū.

②一卷 ③存 ④古寫本(龍大、別置)

假名聖教目錄

①(日)Ka-na-shō-kyō-moku-roku.

②一卷 ③存、眞宗全書第七四 ④光遠院惠空(正保元—享保六A.D. 1644—1721)記

⑤親鸞著書五、同消息集三、覺如著十四、存覺著二十九、法然聖覺隆寬從覺蓮如等著十三、作者未知十九、不審多難書十、撰號あるも不明確の書三十九、都合百三十二部の書目を出す。就中、覺如著のうちに歎異鈔を列ねて「如上人記云云」と註し、また安心決定鈔をも出して「作者云云たれども、當家の傳は覺如上人也、山科記に見へたり、但西山家歎と註する點、注意に價す。

⑥寫本(龍大、一〇三・五一) (柏原祐義)

假名法語

①(日)Ka-na-hō-go.

②一卷 ③存、一休和尚全集、新訂禪學名著集 ④一休宗純(應永元—文明一三A.D. 1394—1481)述

⑤一休禪師假名法語と世稱するもので、京都紫野大德寺四十八世一休宗純禪師が信者の婦女子に示された假名法語である。夢幻の世の中に油斷なく佛法を修行し、久遠を今日として無念無想の佛を唯心に觀ぜしめ、參禪に心を盡すことをすゝめ、栢樹子、南泉斬猫、百丈野狐等の禪門に於ける公案古則の取扱ひ方をも平易に示したものである。

⑥假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑦假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑧假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑨假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑩假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑪假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑫假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑬假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑭假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑮假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑯假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑰假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑱假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑲假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

⑳假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉑假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉒假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉓假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉔假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉕假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉖假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

㉗假名法語 ①(日)Ka-na-hō-go. ②一卷 ③存、禪門法語集之内 ④至道無難

①(慶長八—延寶四 A.D. 1603—1676)述
明治二八、大正一〇刊(駒大)大正四寫、眞
蹟模寫本(京大、日大末・四九五)

假名法語

①(日)Ka-na-ho-go. ②
一卷 ③存、白隠和尚全集之内 ④白隠慧
鶴(貞享二—明和五 A.D. 1685—1768)述

①日本臨濟中興の祖と稱せらるる白隠慧鶴
禪師の信者の某居士に示された「白隠禪師
假名法語」である。道情も進み精進の助け
にもなる法語をと乞はれて、山梨了徹居士
の勇猛なる參禪物語より始め、時々思ひ出
しては修道するが如きは、妄想情念に打負
かされて打泣きつつ念佛する様なもので
「虫歯の薬にもならざる修行なるべし。誰に
もせよ二度三度も呼吸の息も絶え果てて、
自ら生死を辨へぬほど勵み進まざれば、
しかとしたる得力は、努々是れあるべから
ず。縦ひ一旦閑地一下の得力これありて後
も、動靜の二境を嫌はず、正念工夫の相續
肝要たるべし」と示して居る。安禪者流へ
のよき頂門の一針である。(大久保堅瑞)

假名法語

①(日)Ka-na-ho-go. ②
一卷 ③存 ④漢道撰 ⑤刊本(京大、二五
タ・五)

假名律

①(日)Ka-na-mugura. ②
一卷 ③存 ④白隠慧鶴(貞享二—明和五
A.D. 1685—1768)述 ⑤明治一七刊 ⑥
(帝國)一〇九・一九五、一八三・二八八(立
大、A五〇・三)(京大、二五カ・四)

假名律新談義

①(日)Ka-na-mugura-tsuketari-shin-dan-gi. ②一卷
③存 ④白隠慧鶴(貞享二—明和五 A.D.

1685—1768)述 ⑤自筆本覆刻(駒大)
荷澤和尚禪要 ①(日)Ka-taku-o-shō-zenn-yō. (文)Ho-se-ho-shang-ōhan-yō. 河澤和尚禪要 ②一卷 ③存 ④
〔參考〕智證大師請來目錄

荷澤顯宗記 ①(日)Ka-taku-ken-shō-ki. (支)Ho-tse-hsien-tsung-chi. 顯宗
記 ③存、正三〇・一〇 ④唐荷澤神會總
章元一上元元 A.D. 688—760)述 ⑤參
考〕禪籍志卷上

訶字門

①(日)Ka-ti-mon. ②一卷
③存、大日本佛教全書第二八智證大師全集
第四 ④圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—
831)說寛平四、年七八寂撰

訶字門灌頂祕印

①(日)Ka-ti-mon-kan-jō-hin. ②一卷 ③存 ④文
政五寫 ⑤(立大、A二〇・一四九)

訶利底母因緣經

①(日)Ka-ri-tei-mo-in-en-gyō. (支)Ho-li-ti-ma-yin-
yuan-ching. 訶利底母因緣經 ②一卷
③根本說一切有部毘奈耶雜事第三十卷の抄
出。

訶梨帝母

①(日)Ka-ri-tei-mo. ②
一卷 ③存、大日本佛教全書第五〇覺禪鈔
之内 ④覺禪(壽永頃 A.D. 1182—1185
—)撰

訶梨帝母

①(日)Ka-ri-tei-mo. ②
一卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛
抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A.D.
1205—1282)撰

訶利帝母真言經

①(日)Ka-ri-tei-mo-shin-gon-gyō. (支)Ho-li-ti-mu-chēn-yen-ching. (藏)Harit-mantra. 訶利帝母
經、訶利帝母真言法、訶利帝母法 ②一卷
③存、大正二二・二八九 No. 1261、縮印
四、正二七・二、北3375感、南1379阿、元
1363阿、明北1422、清1442、麗1332阿、
天1359風、法1441、至670君、明南1151
無、三十帖策子第一六、Nj. 1449. ④唐不空
(神龍元—大曆九 A.D. 705—774)譯
⑤本書は訶利帝母真言法とも傳つてをり、
略して訶利帝母經といふ。この中最も主要
なるものは形像法である。曰く「天女形純
金色、身に天衣を著け頭に瓔珞を冠し宣臺
上に坐し兩足を垂下す。垂足兩邊に於て二
孩子を置き宣臺に傍ひて立つ、二膝の上に
各一孩子を坐せしめ左手を以て懷中に一孩
子を抱く、右手の中に於て吉祥果を持す。」
と、總體は訶利帝母念誦法ともいふべきも
のび、之を分類すると眞言、形像、壇法、
誦呪法とすることが出来る。

訶利帝母真言法

①(日)Ka-ri-tei-mo-shin-gon-hō. (支)Ho-li-ti-mu-chēn-yen-fa. 訶利帝母真言經、訶利帝母經、訶
利帝母法 ②一卷 ③存、大正二二・二八九
No. 1261、縮印四、正二七・二、北3375
感、南1379阿、元1368阿、明北1442、清
1442、麗1332阿、天1359阿、法1441、
至670君、明南1151無、三十帖策子第一六、
Nj. 1449. ④唐不空(神龍元—大曆九 A.D.
705—774)譯

訶利帝母天法

①(日)Ka-ri-tei-mo-ten-hō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫
⑤(寶龜院)
訶利帝母念誦次第 ①(日)Ka-ri-tei-mo-nen-jū-shi-dai. ③存 ④(寶龜院)
賀島文書 ①(日)Ka-shima-mon-jō. ③
三通 ④存 ⑤寫本(立大、D〇・三三〇)
賀茂社櫻會緣起 ①(日)Ka-mo-sha-sakura-e-en-gi. ②一卷 ③存、續群
書類第一五 ④掃除頭佐國撰 ⑤永保三
(A.D. 1083)
⑥京都賀茂神社の神主縣主成助が三春の分
節に、法華經を開演するのを、隨喜の者、
櫻會というた。それは別に期日を定めてな
く、二三月の櫻の開く季節に行はれて來た。
この法會を留めんことは殊勝なる神壇の嚴
飾である。近年法華二十八品と各一品づゝ
八相營に迎へて、或は自書し、或は人をして
書課せしむることが行はれる。これは法
樂を神明に捧げ、皇運の遐昌を祈るものだ
と、神主賀茂成經の令に依て漢文を以て記
したものである。(中谷在禪)
華場國師別傳 ①(日)Kwa-u-koku-shi-betsu-den. ②一卷 ③存 ④〔參考〕
禪籍目錄
華山院家四十八問答 ①(日)Kwa-zan-in-ke-shi-jū-hachi-mon-dō. 華山院
家六八問答 ②一卷 ③存、大正八三・四
九〇 No. 2633 ④道教顯意(仁治元—嘉元
二 A.D. 1240—1304)一説嘉元三、年六七
寂撰 ⑤正應五(A.D. 1292)
⑥華山院家の四十八の問に對し、道教顯
意が、簡單に而も明晰に淨土宗の本旨を答